

学校臨床学的アプローチによる学級活動測定尺度の開発(1)

—小学校を対象として—

長谷川 祐介*1・太田 佳光*2・白松 賢*3・久保田 真功*4

【要 旨】 本稿は、学校臨床学的アプローチに基づいて、学級や学校の生活づくりに関する学級活動の効果測定を目的とする尺度開発の可能性について検討した。学級活動について、開発的アプローチに関連する尺度が流行しているのに対し、今後の解決的アプローチに基づく尺度開発の必要性を指摘した。そこで実際に項目作成し、小学校4年生と6年生を対象にした調査を行った。その結果を踏まえ学級活動に関する測定尺度開発にむけた課題を考察した。

【キーワード】 学級活動 解決的アプローチ 尺度開発

I はじめに

本稿の目的は、学校臨床学的アプローチに基づいて、学級や学校の生活づくりに関する学級活動の効果測定を目的とする尺度開発の可能性について検討することである。

2011年度より小学校の新学習指導要領が全面実施された。新学習指導要領において重要な点は、学力重視という点である。思考力・判断力・表現力等の学力育成が重要とされ、教科内容の改善が図られるとともに、教科に関する時間数が増加した。

一方、教科以外の活動領域についてみると道徳教育の充実、小学校については外国語活動の導入などの改訂が行われた。しかし特別活動については体験活動の充実など一部を除いて、学習指導要領全体の改訂のポイントとして注目を浴びることはなかった。学力向上に関連して学習指導に注目が集まる中で、次回以降の学習指導要領改訂において、特別活動は正課活動として位置づけられるかどうか、不透明な状況になっている。

しかし実際の小学校現場において、特別活動の果たす役割は決して小さくない。特に本稿において着目する学級活動は、子どもたちの学級・学校生活において欠かすことができない領域である。なぜなら学級活動が学級や学校生活で生じるトラブルの解決場面となっていることや、

平成24年5月31日受理

*1 はせがわ・ゆうすけ 大分大学教育福祉科学部発達科学教育講座(教育学)

*2 おおた・よしみつ 愛媛大学教育学部

*3 しらまつ・さとし 愛媛大学教育学部

*4 くぼた・まこと 富山大学人間発達科学部

学級生活を向上させるための組織づくりや役割分担を決定する場面であるからである。

また近年、学級や学校生活の向上に資するために、教育現場と共同で教育実践に取り組み研究を行う学校臨床学的アプローチに基づく研究の展開が期待される。学校臨床学的アプローチに基づく研究とは、学術的専門的理論や量的調査、質的調査の分析をもとにして、教育活動のコンサルテーションとモニタリングをする方法を確立することを目指した研究である。本稿は、学級活動を対象にして、学級活動のモニタリングの指標となる尺度を新規に開発することを目指す。

そこで本稿は次について検討する。第1は、現在なぜ新規に学級活動に関する尺度開発が必要なのかを論じる。第2は、尺度開発にむけて新規に項目を作成する。第3は、新規作成した項目を用いて行った質問紙調査の結果を検討する。以上を踏まえて尺度開発に向けた今後の課題について考察する。

II 尺度開発の必要性

はじめに、学級活動に関わる尺度を新規に開発する必要性について検討する。学級活動も含め、広く学級に関する質問紙調査は、これまでも数多くの蓄積がある。近年も継続的に質問紙調査を実施している学問分野は心理学で、たとえば伊藤・松井（2001）などが学級風土に関する尺度開発を行っている。ただし、心理学等で開発されてきた尺度は、主として人間関係に関するものが多く、望ましい人間関係を一つのアウトプットとして測定しようとしている。この点についての成果は蓄積されつつあるものの、学級活動の目標は望ましい人間関係の形成だけにとどまらない。例えば、2011年度より全面実施された小学校の学習指導要領において、学級活動の目標は次のように記されている。

小学校 学級活動

1 目標

学級活動を通して、望ましい人間関係を形成し、集団の一員として学級や学校におけるよりよい生活づくりに参画し、諸問題を解決しようとする自主的、実践的な態度や健全な生活態度を育てる。（下線部筆者）

注目したいのは「集団の一員として学級や学校におけるよりよい生活づくりに参画し、諸問題を解決しようとする」という記述である。これは解決的アプローチに関連する目標である。白松（2011）によれば解決的アプローチとは、学級内の子どもたちの主体的、実践的活動を中心とする領域である「偶発的領域」において生じる学級の「トラブル」に着目する。「トラブル」は学級の人間関係づくりにおいて重要な契機で、それをもとにして子どもたちの主体的、実践的な活動を増大させ、質的に深化・拡充しながら学級の人間関係をよりよいものに向上させる。学級活動は問題解決に資するための中心的な活動と捉えられる¹⁾。

この解決的アプローチに関わる学級活動は、下記の学習指導要領における学級活動の内容の中でも重要な位置づけにあることがわかる。それは内容（共通事項）の「(1) 学級や学校の生活づくり」である。

小学校 学級活動

2 内容

〔共通事項〕

(1) 学級や学校の生活づくり

ア 学級や学校における生活上の諸問題の解決

イ 学級内の組織づくりや仕事の分担処理

ウ 学校における多様な集団の生活の向上

(2) 日常の生活や学習への適応及び健康安全

ア 希望や目標をもって生きる態度の形成

イ 基本的な生活習慣の形成

ウ 望ましい人間関係の形成

エ 清掃などの当番活動等の役割と働くことの意義の理解

オ 学校図書館の利用

カ 心身ともに健康で安全な生活態度の形成

キ 食育の観点を踏まえた学校給食と望ましい食習慣の形成

このように問題解決に関する事項は、学習指導要領において非常に重要な位置づけがなされているにもかかわらず、測定尺度の不在のため、その成果を十分に検証することができない。そこで、学校臨床学的アプローチに基づく研究を展開するためには、学級活動のモニタリングやコンサルテーションに活用されることを目的として、さらなる尺度開発が必要となる。

以上を踏まえ、問題解決に関わる項目を含めた学級活動に関する尺度開発を行った。

Ⅲ 新規作成した尺度項目の内容と調査方法

1 尺度項目の内容と作成方法

表 1 は、学級活動の効果測定を行うことを目的として新規作成する項目の概要である。「学級の生活づくりへの参加」と「学級や学校生活の充実」の 2 点について、個人レベルと学級集団レベルで測定し、統計分析が可能な調査項目を作成した。その結果、表 1 で示しているとおり、調査項目は大きく 4 つに分類することができる。

表 1 新規作成する項目の概要

	個人レベル	学級集団レベル
学級の生活づくりへの参加	① 学級活動への参加様態	② 学級活動に関する認知
学級や学校生活の充実	③ 学級・学校生活への適応感	④ 学級集団向上行動

1) 学級の生活づくりへの参加

①学級活動への参加様態

「学級活動への参加様態」は個人レベル、すなわち個々の子どもたちが学級活動を通して学級の生活づくりに参加しているのか、という点を明らかにするための項目群である。今回、解決的アプローチに関わる項目の作成を目的としていることから、学習指導要領において定められている学級活動の共通項目「学級や学校の生活づくり」の場面、特に学級会など学級活動の中心的な活動形態である話し合い活動の場面を想定して項目を作成した。

話し合い活動への参加は大きく2つの方法がある。第1は、発言、すなわち「言う」ことである。発言は話し合いの起点となる行為である。学級の中で問題となっている事柄について、子どもたちがそれぞれ自分の意見を言うことができるのか、もしくは妥協せず、他の人に意見を言うことができるかどうか、ということなどが「言う」にあげられる。

第2は、「聞く」ことである。他の人が発言したとき、それを遮ったり邪魔したりするのではなくきちんと聞くことができるのか、もしくは単に聞くだけではなく、発言している人の立場に立って聞くことができていくのか、などが事例としてあげられる。

それ以外に学級活動の参加様態として、話し合いの結果に対する「納得」に関する項目を設定した。話し合い活動において何か決まったとしても、子どもたちが不満を持っている状況は望ましくない。望ましいのは子どもたちが納得するまで話を続け、決まった事柄について納得することである。さらに学級活動への参加に関する「楽しさ」についても項目を設定した。以上を踏まえ、最終的には9項目を作成した(表2)。

表2 学級活動への参加様態に関する項目

言う	学級で話しあいをするとき、自分の意見を言うことができる 学級で話しあいをするとき、他の人の考えに付け足しや賛成の意見をいえる 学級の話しあいでは、他の人の意見に、反対や違う意見もきちんといえる 学級で話しあいをするとき、自分の意見の理由をきちんと伝える
聞く	学級で話しあいをするとき、他の人の意見をしっかり聞くことができる 学級で話しあいでは、他の人の意見を聞くとき、その人の立場になって考えるようにしている
納得	学級で話しあいをするときは、なっとくするまで話しあいを続ける 学級で話しあって決めたことは、たいていなっとくすることができる
楽しさ	学級で話しあいをするときは、楽しい

②学級活動に関する認知

次の「学級活動に関する認知」は各学級の学級活動の様子を集団レベルで把握するために設定した項目群である。具体的にはそれぞれ子どもの子どもの自分の学級における学級活動の様子をどのように認知しているのか、を明らかにする項目である。①と同様、共通項目(1)学級や学校の生活づくりに関わる場面を想定した。学習指導要領の内容に対応させ、次の3点から項目を作成した。

第1は、「諸問題の解決」である。これは「ア 学級や学校における生活上の諸問題の解決」

に対応する。学級会などで学級の目標（めあて）などについて話し合い、問題を解決する状況などが想定される。

第 2 は、「組織づくりや仕事の分担処理」である。これは「イ 学級内の組織づくりや仕事の分担処理」に関連する項目である。学習指導要領解説によれば、「学級や学校での生活を充実、向上させるために、必要とされる学級内の組織づくりや仕事の分担などを、児童自身が見だし、協力していこうとする活動」（文部科学省 2008, 36 頁）であり、そのような状況や場面に關する項目が設定される。

第 3 は、「生活の向上」である。これは「ウ 学校における多様な集団の生活の向上」に関連する項目である。学習指導要領解説によれば、児童は「多様な集団に所属し、その一員として生活の向上を目指して発達の段階に即した役割などを果たす活動を通して、望ましい人間関係を築く態度を形成したり、所属感を含め、社会性や公共の精神などを培ったりする」（文部科学省 2008, 36 頁）とされている。たとえば決められた係だけをこなすのではなく、他の人が困っていたら助け合うことができるのか、また学級全体として学校行事に積極的になっているのか、などである。以上を踏まえ、最終的には 8 項目を作成した（表 3）。

表 3 学級活動に関する認知に関する項目

諸問題の解決	わたしの学級では、何か困ったことがあると、みんなで話しあって解決する わたしの学級では、学級の目標（めあて等）をしっかりと話しあって決めた
組織づくりや仕事の分担処理	わたしの学級では、学校行事や学級の活動で、学級目標（めあてなど）を意識している わたしの学級では、学級のルールやきまりをきちんと守るよう努力している わたしの学級では、どのような行事でも全員が力をあわせて準備をする わたしの学級では、係や当番活動の内容（仕事）を話しあって決める
生活の向上	わたしの学級では、係や当番以外の人も、ほかの係や当番の活動を助けたりすることが多い わたしの学級では、運動会など、学校行事の準備を熱心にする（した）

2) 学級や学校生活の充実

小学校の学級活動の内容、共通事項の「学級や学校の生活づくり」は、「児童自らが楽しく充実した学級や学校の生活をつくっていくことを内容としている」（文部科学省 2008, 35 頁）ことから、学級活動の重要なねらいは子どもたちの「学級や学校生活の充実」といえる。学級や学校生活が充実したものになっているかどうか、子どもたちがどのようにとらえているのかという点について、個人レベルと学級集団レベルそれぞれから項目作成する必要がある。

③学級・学校生活への適応感

「学級・学校生活の適応感」は「学級・学校生活の充実」に関する個人レベルの項目群である。すなわち、個々の子どもたちが学級や学校生活を楽しみ、充実したものであると捉えているのか、という点を明らかにするための項目である。具体的には次の項目を作成した。

まず「学級や学校生活の楽しさ」である。学級や学校が楽しいかどうか、学級生活や学校生活が好きかどうかなどを明らかにするための項目である。「今の学級が好きだ」や「学校には楽しいことがたくさんある」などが挙げられる。また友人関係に関する項目「昼休みや休けい時間は、学級のともだちとよくおしゃべりをする」も項目に含めた。

それ以外に次の2つの項目を作成した。1つは「規範意識」である。集団生活を充実させていくためには、楽しいだけでは不十分である。一定の規律を遵守することによって、生活の質は向上する。また話し合い活動のねらいの1つは、生活のルール作りであることからわかるとおり、ルールを遵守しているかどうかは、学級や学校生活の充実に欠かせない要因である。そこで「学校のきまりを守ろうとしている」や「ほかの人にわからなかったら、きまりをやぶってもかまわない」（逆転項目）という項目を作成した。

もう1つは「教師との関係」である。学級集団は子どもだけではなく、教師も重要なメンバーである。学級担任制である小学校の場合、担任教師が子どもたちとどのように関わっているのか、ということは学級や学校生活を送るときに、重大な影響を及ぼす可能性がある。そこで「担任の先生に、自分の意見を素直に言うことができる」「担任の先生は、いっしょに遊んでくれる」等の項目を作成した。以上を踏まえ、最終的には13項目を作成した（表4）。

表 4 学級・学校生活への適応感に関する項目

学級や学校生活の 楽しさ	学校には楽しいことがたくさんある 今の学校は楽しいので、いつまでもこの学校にいられたらよいのと思う 学校に行きたくないと思うことがある * 今の学級が好きだ 学級が前にくらべて、よくなっていると感じる 学級はあたたかいと感じる 昼休みや休けい時間は、学級のともだちとよくおしゃべりをする
規範意識	ほかの人にわからなかったら、きまりをやぶってもかまわない * 学校のきまりを守ろうと思っている
教師との関係	担任の先生に、自分の意見を素直に言うことができる 担任の先生は、ともだちとのけんかや言い争いのとき、解決をしてくれる 担任の先生は、いっしょに遊んでくれる。 担任の先生には何でも相談できる

※ *は逆転項目

④学級集団向上行動

学級や学校生活の充実にに関する集団レベルの項目群である「学級集団向上行動」は次の方法で作成した。まず関連する尺度として学級風土や学級の雰囲気に関する尺度（たとえば伊藤・松井 2001 や高木 1986）などを参考にした上で、解決的アプローチが目指す学級集団の状況や、集団を高めるための行動を想定して項目を作成した。

第1は、「認めあい」に関する項目である。他者との違いを認める、もしくは他者や自分自

身の失敗・間違いを許す雰囲気が学級に存在しているかどうかを示す項目である。たとえば「わたしの学級には、安心して失敗することができる雰囲気がある」である。

第 2 は、「高めあい」に関する項目である。よりよい生活をつくる雰囲気が学級に存在しているかどうか、ということを示す項目である。たとえば「わたしの学級では、いろいろなことにチャレンジする人が多い」などである。

第 3 は、「戒めあい」に関する項目である。自分や集団の問題に気づき、問題と感ずることを適切に表現できるかどうかを示す項目である。たとえば「わたしの学級では、ほかの人を注意するとき、言葉で伝えあうことができる」などである。

それ以外に学級における「トラブル」に関する項目、具体的には「わたしの学級では、よくけんかやもめごとがおこる」を加えた。以上を踏まえ、最終的には 8 項目を作成した（表 5）。

表 5 学級集団向上行動に関する項目

認めあい	わたしの学級には、安心して失敗することができる雰囲気がある わたしの学級では、だれかが失敗や間違いをしても、けつてせめたり、笑ったりしない
高めあい	わたしの学級では、だれとでも協力しあって活動することができる わたしの学級では、こまっている子がいたら、おたがい助けあうことができる わたしの学級では、いろいろなことにチャレンジする人が多い
戒めあい	わたしの学級では、ほかの人を注意するとき、言葉で伝えあうことができる わたしの学級では、おたがいすなおに自分の意見をいうことができる
トラブル	わたしの学級では、よくけんかやもめごとがおこる

以上の①から④すべての項目は合計 38 項目となった。①から④いずれも各項目について「とてもあてはまる」から「まったくあてはまらない」の 5 段階で評価してもらうこととした。

調査項目のワーディングについては、本質問紙調査が小学校 4 年生と 6 年生を対象としたことから、小学校教員に確認を依頼し、その意見を踏まえ適宜修正を行った。

2 調査方法と調査対象者

以上を踏まえ作成した質問紙を用いて、2011 年 12 月に X 県 P 市に所在する小学校の 4 年生と 6 年生の児童を対象に調査を実施した。

表 6 調査対象者の概要

	男	女	性別未回答	計
A小4年(2学級)	37	39	2	78
A小6年(3学級)	59	57	1	117
B小4年(4学級)	59	52	0	111
B小6年(4学級)	66	51	1	118
合計	221	199	4	424

※ 数値は人数。

調査対象校は小学校3校であったが、調査データの整理等の都合上、今回は2校（A小学校とB小学校）の4,6年生の調査データを用いた。調査はA小が4年生2学級と6年生3学級、B小は4年生4学級、6年生4学級の児童を対象に実施し、合計424名から回答を得ることができた。調査対象者の概要は表6のとおりである。

IV 調査結果

1 学級の生活づくりへの参加

1) 学級活動への参加様態

表7は「学級への参加様態」の基礎統計量（平均値、標準偏差）と単純集計である。

「言う」「聞く」「納得」「楽しさ」のうち、「聞く」に関する項目の平均値が高かった。特に「学級で話しあいをするとき、他の人の意見をしっかりと聞くことができる」は平均値が高く、4.37であった。単純集計の結果を見ても「とてもあてはまる」の割合が49.4%と半数近くに達しており、多くの子どもたちは学級での話し合いの時しっかりと聞くことができていると自己評価していた。また「納得」に関する項目も平均値は高かった。特に「学級で話しあって決めたことは、たいていなっとくすることができる」は平均値が4.27と高い数値を示していた。さらに「楽しさ」に関する項目「学級で話しあいをするときは、楽しい」も平均値が4.07と高い数値を示していた。多くの子どもたちは学級活動の話しあいにおいて、他者の話をしっかりと聞

表7 学級活動への参加様態に関する項目（基礎統計量と単純集計）

		基礎統計量			単純集計					合計
		平均値	標準偏差	平均値+標準偏差	とてもあてはまる	ややあてはまる	どちらともいえない	あまりあてはまらない	まったくあてはまらない	
言う	学級で話しあいをするとき、自分の意見を言うことができる	3.79	1.09	4.88	32.3%	31.6%	20.9%	13.3%	1.9%	100.0% (421)
	学級で話しあいをするとき、他の人の考えに付け足しや賛成の意見をいえる	3.71	1.18	4.89	32.9%	26.7%	23.6%	12.4%	4.5%	100.0% (420)
	学級の話しあいで、他の人の意見に、反対や違う意見もきちんといえる	3.70	1.20	4.90	33.3%	26.4%	23.3%	11.6%	5.5%	100.0% (421)
	学級で話しあいをするとき、自分の意見の理由をきちんと伝える	3.63	1.17	4.80	29.0%	28.3%	23.8%	14.5%	4.5%	100.0% (421)
聞く	学級で話しあいをするとき、他の人の意見をしっかりと聞くことができる	4.37	0.76	5.13	49.4%	42.0%	5.7%	1.9%	1.0%	100.0% (421)
	学級で話しあいでは、他の人の意見を聞くとき、その人の立場になって考えるようにしている	3.83	1.04	4.87	29.5%	38.5%	20.9%	8.1%	3.1%	100.0% (421)
納得	学級で話しあいをするときは、なっとくするまで話しあい続ける	3.87	1.00	4.87	32.8%	31.3%	28.0%	6.2%	1.7%	100.0% (418)
	学級で話しあって決めたことは、たいていなっとくすることができる	4.27	0.88	5.15	49.0%	34.5%	11.4%	4.3%	0.7%	100.0% (420)
楽しさ	学級で話しあいをするときは、楽しい	4.07	1.07	5.14	46.2%	26.6%	17.9%	6.7%	2.6%	100.0% (418)

※ 平均値と標準偏差は「とてもあてはまる」を5、「まったくあてはまらない」を1と配点した上で算出した。

※ 単純集計の（ ）は人数。

き、また決めたことには納得をしており、話しあいそれ自体、楽しいものだったと考えていた。

一方、「言う」については、平均値が 3.00 を超えているものの「聞く」「納得」「楽しさ」と異なり、平均値が 4.00 以上の項目はなかった。「言う」の中でもっとも平均値が高かったのは「学級で話しあいをするとき、自分の意見を言うことができる」で 3.79 であった。また単純集計結果をみると「言う」に関する項目すべてにおいて「あまりあてはまらない」の割合が 10% 以上であった。これらのことから学級活動の話しあいにおいて、たいていの子どもたちは自分の意見を言うことができていたが、一部発言することに消極的な子どもたちがいたと考えられる。

2) 学級活動に関する認知

次に「学級活動に関する認知」の結果を見てみたい。

表 8 は「学級活動に関する認知」の基礎統計量（平均値、標準偏差）と単純集計である。「諸問題の解決」「組織づくりや仕事の分担処理」「生活の向上」いずれも平均値はおおむね 4.00 と高い数値を示していた。また単純集計結果を見てみても「とてもあてはまる」の割合がおおむね 50% 前後を示していた。このことから多くの子どもたちは、自分たちの学級は諸問題の解決や組織づくりや仕事の分担処理、生活の向上の取り組みについて積極的であると評価していたのである。

ただし、「諸問題の解決」の中でも「わたしの学級では、何か困ったことがあると、みんなで

表 8 学級活動に関する認知に関する項目（基礎統計量と単純集計）

		基礎統計量			単純集計					合計
		平均値	標準偏差	平均値＋標準偏差	とてもあてはまる	ややあてはまる	どちらともいえない	あまりあてはまらない	まったくあてはまらない	
諸問題の解決	わたしの学級では、何か困ったことがあると、みんなで話しあって解決する	3.96	1.02	4.98	36.2%	34.5%	21.5%	5.0%	2.8%	100.0% (423)
	わたしの学級では、学級の目標(めあて等)をしっかり話しあって決めた	4.44	0.82	5.26	61.5%	24.1%	11.6%	2.6%	0.2%	100.0% (423)
組織づくりや仕事の分担処理	わたしの学級では、学校行事や学級の活動で、学級目標(めあてなど)を意識している	4.11	0.93	5.04	40.9%	35.7%	18.4%	3.3%	1.7%	100.0% (423)
	わたしの学級では、学級のルールやきまりをきちんと守るよう努力している	4.22	0.90	5.12	47.9%	31.5%	16.6%	3.1%	0.9%	100.0% (422)
	わたしの学級では、どのような行事でも全員が力をあわせて準備をする	4.35	0.87	5.22	54.7%	31.3%	9.2%	3.8%	0.9%	100.0% (422)
	わたしの学級では、係や当番活動の内容(仕事)を話しあって決める	4.34	0.92	5.26	57.2%	25.3%	13.5%	2.4%	1.7%	100.0% (423)
生活の向上	わたしの学級では、係や当番以外の人も、ほかの係や当番の活動を助けたりすることが多い	4.04	1.02	5.06	40.8%	33.4%	17.5%	5.7%	2.6%	100.0% (422)
	わたしの学級では、運動会など、学校行事の準備を熱心にする(した)	4.54	0.77	5.31	68.3%	20.1%	9.2%	2.1%	0.2%	100.0% (423)

※ 平均値と標準偏差は「とてもあてはまる」を 5、「まったくあてはまらない」を 1 と配点した上で算出した。

※ 単純集計の () は人数。

話しあって解決する」の項目の結果には留意が求められる。解決的アプローチでは問題解決を積極的に行う学級活動や学級づくりが必要であると考えているのだが、子どもたちの評価は他の項目と比べて決して高くない。この項目の平均値は 3.96 となっており、他の項目が 4.00 以上であるのに比べて平均値がやや低かった。また「とてもあてはまる」の割合が 36.2%と3分の1程度に留まっている一方、「どちらともいえない」の割合が 21.5%と他の項目と比べてやや高かったのである。学級活動の中でも、特に問題解決に関する活動は改善の余地があると考えてよいかもしれない。

2 学級や学校生活の充実

1) 学級・学校生活への適応感

表 9 は「学級・学校生活への適応感」の基礎統計量（平均値、標準偏差）と単純集計である。

「学級や学校生活の楽しさ」「規範意識」に関する項目をみてみると、逆転項目を除いておおむね平均値が 4.00 以上であった。また単純集計の結果をみると、逆転項目以外の項目はすべて「とてもあてはまる」の割合が 50%から 70%であったことから、多くの子どもたちは学級や学校生活に楽しさを感じることができており、また規範意識も高いことがわかる。ただし逆転項目の「学校に行きたくないと思うことがある」は平均値が 2.45 で「とてもあてはまる」の割

表 9 学級・学校生活への適応感に関する項目（基礎統計量と単純集計）

		基礎統計量			単純集計					合計
		平均値	標準偏差	平均値＋標準偏差	とてもあてはまる	ややあてはまる	どちらともいえない	あまりあてはまらない	まったくあてはまらない	
学級や学校生活の楽しさ	学校には楽しいことがたくさんある	4.55	0.81	5.36	69.3%	20.8%	5.9%	3.3%	0.7%	100.0% (424)
	今の学校は楽しいので、いつまでもこの学校にいられたらよいのにと思う	4.33	0.96	5.29	58.3%	24.3%	10.6%	5.4%	1.4%	100.0% (424)
	学校に行きたくないと思うことがある *	2.45	1.46	0.99	12.4%	16.4%	15.2%	15.2%	40.7%	100.0% (420)
	今の学級が好きだ	4.40	0.93	5.33	62.5%	22.9%	8.5%	4.7%	1.4%	100.0% (424)
	昼休みや休けい時間は、学級のともだちとよくおしゃべりをする	4.61	0.77	5.38	74.2%	17.0%	5.9%	1.7%	1.2%	100.0% (423)
	学級はあたたかいと感じる	4.31	0.92	5.23	54.8%	27.9%	12.3%	3.5%	1.4%	100.0% (423)
	学級が前にくらべて、よくなっていると感じる	4.23	0.99	5.22	52.6%	26.2%	15.3%	3.5%	2.4%	100.0% (424)
規範意識	ほかの人にわからなかったら、きまりをやぶってもかまわない *	1.71	1.02	0.69	2.1%	5.7%	12.3%	21.0%	59.0%	100.0% (424)
	学校のきまりを守ろうと思っている	4.42	0.82	5.24	58.2%	30.0%	8.7%	1.9%	1.2%	100.0% (423)
教師との関係	担任の先生に、自分の意見を素直に言うことができる	3.81	1.06	4.87	30.2%	35.6%	21.5%	10.1%	2.6%	100.0% (424)
	担任の先生は、ともだちとのけんかや言い争いのとき、解決してくれる	4.31	0.96	5.27	57.3%	23.9%	12.8%	4.5%	1.4%	100.0% (422)
	担任の先生は、いっしょに遊んでくれる	3.47	1.29	4.76	27.0%	25.3%	25.8%	11.3%	10.6%	100.0% (423)
	担任の先生には何でも相談できる	3.63	1.22	4.85	31.6%	23.6%	27.6%	10.6%	6.6%	100.0% (424)

※ 平均値と標準偏差は「とてもあてはまる」を 5、「まったくあてはまらない」を 1 と配点した上で算出した。

※ 単純集計の（ ）は人数。

※ *は逆転項目。逆転項目の「平均値＋標準偏差」の箇所は、「平均値－標準偏差」の結果を示している。

合が 12.4%と一割を超えていた。理由はさまざまであるだろうが、学校に行くことに抵抗を感じている子どもが一部存在することには留意しておく必要があるだろう。

一方、「教師との関係」に関する項目は、「学級や学校生活の楽しさ」「規範意識」と比べてやや平均値が低く、おおむね 3.50 から 4.00 の間であった。学級づくりや学級経営、さらには生徒指導上、教師は子どもたちと積極的に交流を図ることが求められている。しかしたとえば「担任の先生は、いっしょに遊んでくれる」の結果を見てみると、「まったくあてはまらない」の割合が 10.6%であった。周知の通り多忙化が進み、休み時間においても書類作成などに追われている今日の学校現場において教師は子どもたちと遊ぶ時間を設けることが難しくなっているのであろう。しかししっかりと学級づくりや生徒指導を進めていくためにも、多忙の中でも子どもとかかわりを持つ時間を確保することが課題となっているのではないだろうか。

そのほか、結果の解釈に注意しないといけない項目がある。それは「担任の先生は、ともだちとのけんかや言い争いするとき、解決をしてくれる」である。表 9 のとおりこの項目は、ほかの「教師との関係」に関する項目と違い平均値が 4.31 と 4.00 以上であった。確かに問題解決に対し教師が積極的に関与していると評価することはできる。しかし解決的アプローチによる学級活動が目指していることの 1 つは、できる限り教師の指導や援助が少ない中で、子どもたち自身が自ら問題解決を行うことができるようになることである。それゆえ、「担任の先生は、ともだちとのけんかや言い争いするとき、解決をしてくれる」について「あまりあてはまらない」「まったくあてはまらない」と回答する割合が高かったとしても、子どもたちが自ら積極的に問題解決に取り組む行動が学級の中に存在していれば、それは望ましい状況と考えることができるかもしれない²⁾。

2) 学級集団向上行動

表 10 は「学級集団向上行動に関する項目」の基礎統計量（平均値、標準偏差）と単純集計である。

「認めあい」「高めあい」「戒めあい」「トラブル」のうち、「高めあい」「戒めあい」に関する項目はいずれも平均値が 4.00 以上と高かった。多くの子どもたちは、自分の学級の中にはよりよい生活をつくる集団向上行動が存在し、また自分や集団の問題に気づき問題と感ずることを適切に表現できている集団向上行動があると考えていた。一方、「認めあい」に関する項目は「高めあい」「認めあい」より平均値が低く 4.00 未満であり、「あまりあてはまらない」の割合が 10%を超えていた。他者や自分自身の失敗・間違いを許す言動や行動が学級にあまり存在しないと考えている子どもたちが一部いた。

また「トラブル」に関する項目「わたしの学級では、よくけんかやめごとがおこる」は「ややあてはまる」「どちらともいえない」「あまりあてはまらない」いずれもその割合が 23%前後であった。さらに平均値も 3.12 で中央値の 3.00 に近い値を示していたことから、正規分布に近い回答分布となっていることがわかる。すなわち、学級の中でのトラブル発生について子どもたちの認識には、ばらつきがみられる。学級集団向上行動を含めこれまでの調査結果からわかるように、子どもたち個人の状況や学級集団の状況いずれも比較的良好であるといえる。そうした中でトラブル発生についてはばらつきがあるということは、トラブルが発生するからといって、子どもたちや学級集団の状況が望ましい状況ではないとはいえないかもしれない。

表 10 学級集団向上行動に関する項目（基礎統計量と単純集計）

		基礎統計量			単純集計					合計
		平均値	標準偏差	平均値＋標準偏差	とてもあてはまる	ややあてはまる	どちらともいえない	あまりあてはまらない	まったくあてはまらない	
認めあい	わたしの学級には、安心して失敗することができる雰囲気がある	3.68	1.12	4.80	27.4%	32.9%	24.0%	11.7%	4.0%	100.0% (420)
	わたしの学級では、だれかが失敗や間違いをしても、けっしてせめたり、笑ったりしない	3.72	1.17	4.89	31.4%	31.1%	21.4%	10.9%	5.2%	100.0% (421)
高めあい	わたしの学級では、だれとでも協力しあって活動することができる	4.17	0.98	5.15	48.7%	27.8%	16.9%	5.2%	1.4%	100.0% (421)
	わたしの学級では、こまっている子がいたら、おたがい助けあうことができる	4.21	0.96	5.17	49.9%	28.5%	15.7%	4.5%	1.4%	100.0% (421)
	わたしの学級では、いろいろなことにチャレンジする人が多い	4.34	0.90	5.24	57.2%	25.2%	12.6%	4.5%	0.5%	100.0% (421)
戒めあい	わたしの学級では、ほかの人を注意するとき、言葉で伝えあうことができる	4.07	0.98	5.05	40.4%	35.9%	15.7%	6.7%	1.4%	100.0% (421)
	わたしの学級では、おたがいすなおに自分の意見をいうことができる	4.05	0.94	4.99	38.4%	36.0%	19.1%	5.3%	1.2%	100.0% (419)
トラブル	わたしの学級では、よくけんかやもめごとがおこる	3.12	1.32	4.44	18.8%	23.6%	21.4%	23.1%	13.1%	100.0% (420)

※ 平均値と標準偏差は「とてもあてはまる」を 5, 「まったくあてはまらない」を 1 と配点した上で算出した。

※ 単純集計の（ ）は人数。

V おわりに

本稿は、学校臨床学的アプローチに基づいて、学級活動の効果測定を目的とする尺度開発の必要性について指摘した。その上で項目作成を行い、小学校 4 年生と 6 年生を対象とした質問紙調査の結果について検討を行った。以上を踏まえて、尺度開発に向けた今後の課題について考察する。

第 1 は、統計分析の手法についてである。作成した項目について、本稿で検討したのは単純集計や基礎集計の結果のみだった。周知の通り、尺度開発のためには、尺度の妥当性と信頼性などの確保が求められる。そのためには今後、今回作成した項目の精選などが求められる。分析としては因子分析の実施や α 係数の算出などが必要となるだろう。また今回作成した 4 つの項目群の関連構造などを統計分析に基づいて検討することが要請される。

第 2 は、パネル調査の実施である。先述の通り調査は 12 月に行われたのだが、学級づくりや学級経営の観点から考えると、一般に 12 月は学級集団が充実している時期である。本稿の調査結果からも、そのことが推察される。その理由は天井効果（もしくは床効果）が確認されるからである。天井効果は平均値＋標準偏差が最高値以上となるような、得点分布が高い方に歪んでいる場合のことを指す。床効果は平均値－標準偏差が最低値以下となるような、得点分布が低い方に歪んでいる場合のことを指す。今回の尺度はすべて五件法であったので、平均値＋標準偏差が 5 以上の場合、天井効果があると判断することができ、平均値－標準偏差が 1 以下の場合、床効果があると判断できる。表 7 から表 10 の結果をみたとき、平均値＋標準偏差が 5 以上の項目、また逆転項目の場合は平均値－標準偏差が 1 以下の項目がいくつかみいだされた。

天井効果もしくは床効果があるということは、これ以上調査を繰り返してもスコアの向上（もしくは低下）が見込めない、頭打ちの状況にあると解釈できる。

ただし調査を実施した12月以前の時期、すなわち4月から12月までの間に学級が大きく変化していたと推察される。学級づくりや学級経営は4月にスタートし、さまざまなトラブルや問題が発生し、子どもたちの試行錯誤を通して学級の充実をはかっていく。教育現場と共同で実践し分析する学校臨床学的アプローチに基づく研究を実施するためには、一時点の状況把握だけではなく、学級の変化を捉えないといけない。そのため、今後は1年間で数回の調査、特に12月以前の調査実施が必要となるだろう。

今回の尺度開発については新規に始まったばかりである。以上の2点を踏まえながら、今後のさらなる調査分析の進展が望まれる。

付記：本稿は平成23年度科学研究費補助金挑戦的萌芽研究（課題番号：23653302 社会的構築主義を基盤とした学級活動の理論化と学校臨床学的研究 代表者：太田佳光）の助成を受けた研究成果の一部を報告するものである。

注

- 1) 解決的アプローチによる学級活動の詳細は、白松（2007, 2011）を参照されたい。
- 2) 無論、学級内に子どもたち自らが問題解決に取り組む行動が少ない場合、「担任の先生は、ともだちとのけんかや言い争いのとき、解決をしてくれる」について「あまりあてはまらない」「まったくあてはまらない」と回答する割合が高いと学級内の秩序が乱れ、子どもたちが安心して学習や生活を送ることができなくなることが危惧される。それゆえ教師は学級内の子どもたちの問題解決に取り組む行動の多寡について適切な判断が求められる。

参考文献

- 相原次郎・新富康央・南本長穂編著（2010）『新しい時代の特別活動』ミネルヴァ書房。
- 伊藤亜矢子・松井仁（2001）「学級風土質問紙の作成」『教育心理学研究』第49号，pp.449-457。
- 片岡徳雄編著（1990）『特別活動論』福村出版。
- 佐々木正昭（2008）「特別活動の予防的開発的生徒指導としての役割についての考察」『日本特別活動学会紀要』第16号，pp.15-20。
- 白松賢（2007）「これからの学級活動の創造 -「問題解決」に着目して-」『日本特別活動学会紀要』第15号，pp.1-10。
- 白松賢（2011）「人間関係づくりと「トラブル」の問題化」『初等教育資料』第873号，pp.68-71。
- 高木修（1986）「いじめを規定する学級集団の特徴」『関西大学社会学部紀要』第18巻第1号，pp.1-29。
- 文部科学省（2008）『小学校学習指導要領解説特別活動編』東洋館出版社。

Clinical Research Approach for Developing a Measure Scale for Classroom Activities (1)

— For Elementary School Students —

HASEGAWA, Y., OOTA, Y., SHIRAMATSU, S. and KUBOTA, M.

Abstract

This paper aims to examine the possibility of developing a measuring scale for classroom activities based on a clinical research approach.

In recent year, in order to measure the effectiveness of classroom activities, a measuring scale related to a developmental approach has generally been used. However, in future it will be important to develop a measuring scale for classroom activities related to a problem solving approach.

To this end, we actually created such items. We conducted a questionnaire survey of fourth graders and sixth graders.

Based on the results of the questionnaire, we examine the task for developing a measuring scale for classroom activities.

【Key words】 classroom activities, problem solving approach, developing a measuring scale for classroom activities